

紹介と批評

Randa AbdelFattah,

Islamophobia and Everyday Multiculturalism in Australia

本書は、スカーフやブルカを普段着用しない若手女性ムスリム研究者が、多文化主義国家オーストラリアで増殖中の「イスラーム嫌悪 (Islamophobia)」の人々に根掘り葉掘りインタビューした民族誌学的な調査を基礎にして、イスラーム嫌いになった理由を明らかにしようとするものである。オーストラリアには総人口二四〇〇万人の二%前後に当たる数のムスリム系の人々(北アフリカ・中東・南および東南アジア諸国からの移民・難民とその第二世代)が定住している。その多くはシドニーやメルボルンなどの大都会に居住しているが、ムスリム系の人々の来豪の歴史は古い。

その嚆矢は、一九世紀半ば以降にオーストラリア大陸内部の北部が開発されはじめると、大陸内部の交通機関とし

てラクダが導入され、その御者・飼育担当者としてアフガニスタン人が移住すると同時に、レバノンやトルコからの行商人が来住した。その数はオーストラリアが白豪主義を採用していた二〇世紀初めから半ばまでは減少・停滞傾向にあったが、白豪主義を撤廃した一九七〇年代半ば以降、移民・難民として移住するものが増加した。

戦後の中東からの移住者には、当初はキリスト教徒が多かったが、七〇年代後半以降はイスラーム教徒が主体となっている。近年ではインドネシアやマレーシアからのムスリム移民も目立っている。白豪主義終焉後のオーストラリアでは多文化主義が政府によって導入されたこともあり、一九八〇年代では北アフリカ・中東系ムスリムへの反発は少なく、むしろアジア・太平洋国家化するオーストラリアに急増する東アジア系非ムスリム系移民・難民の急増に対する反発と多文化主義批判が目立っていたが、一九九〇年代以降になると、東アジア系非ムスリム系移民人口に加えて北アフリカ・中東系ムスリムへの批判や反発が目立つようになる。さらに、二〇〇一年の九・一一ハイジャック連続テロ以降は、東アジア系非ムスリム住民への批判は影を潜め、もっぱらムスリム批判が中心となった。二〇〇〇年代と二〇一〇年代はムスリム批判と多文化主義批判が猛威

を振るいはじめた時代だといってよい。

本書は、そうしたなかで成長したオーストラリア白人育ちのムスリム若手研究者による、オーストラリア白人を中心としたイスラーム嫌悪の研究である。本研究が明らかにすることは、イスラーム嫌いの実態は、イスラームやムスリムに対する恐ろしいほどの無知と、無知に基づく誤解・偏見を基礎にしたものであること、また、イスラーム嫌悪者と同じように無知・誤解・偏見に満ちた報道でムスリム全体を「過激なテロリスト集団」であるかのように印象付けようとするだけでなく、オーストラリアに定住してもイスラーム信仰とその信仰に基づく伝統的慣習や行動規範を頑なに維持しているムスリムの頑固さを印象付けようとするメディアの影響力の大きさ、その影響により国民の間に文化不安や生活不安が広がったことが、イスラーム嫌悪者の増殖の背景にあること、さらに、イスラーム嫌悪は、差別指向のある個人や集団による現象ではあるが、伝統的にオーストラリアの英語系白人や非英語系白人移民定住者のもつ「白人優位性 (white supremacy)」と白人のもつ社会的価値・権力の中心性を暗黙の前提とする思考様式を深く社会化・内面化しており、このまま放置しておけばオーストラリアがムスリムに乗っ取られてしまい、白人とそ

文化が脅かされ自分たちがいずれ周辺化されてしまうという不安に駆られており、多文化主義を採用しつつも白人性 (whiteness) とホワイト・ナシヨナリズムに基づく同化主義・排他主義・自文化中心主義が発動された結果であることを明らかにする。ゆえに、イスラーム嫌悪への対応は、イスラーム嫌悪者へのイスラームとオーストラリア在住のムスリムについての正しい知識に基づく教育や、市民教育で無知・誤解を解消すればよいとは、社会的結束とリベラル・ナシヨナリズムが強調される今日のオーストラリアでは、とても思えないということになる。著者は、インタビュー対象者のイスラームへの無知を眼前にして、しばしばイスラームについてインタビューの場で、誤解を解きたいという誘惑に駆られるものの自制して、研究を完成させている。

紹介

目次は以下の通りである。

- Introduction : Crudely Islamified mannequin man
- 1. Islamophobia and racial Australization
- 2. Muslim religiosity, symbols and spaces
- 3. Multiculturalism and indigestible muslims

4. Lebanese Muslim: a Bourdieuan "capital" Offence in
Bayside
 5. Affective registers and emotional practices of
Islamophobia
 6. When the other otherize
- Conclusions: 'attention to inattention'
- Appendix
- Index

序論では、最初に二〇一四年八月にシドニー南西部の郊外のムスリム集住地域 (Lakemba) で起きた事件が紹介される。事件は、その地域の商店街の一角に飾ってある男性マネキンが、イスラーム系住民の服装に似せた服を着させられると同時に、マネキンの顔に髭が落書きされるといふ「小さな嫌がらせ」事件だった。そのことを切っ掛けにシドニーの大衆紙『テレグラフ』の記者が、シドニー南西地域郊外とその中心部についてのドキュメントと称する記事を掲載し、シドニーのイスラーム嫌悪者を刺激して論争が巻き起こされた。著者は、その記事の内容が、イスラーム嫌いの人々を対象にした、ムスリム系住民に対する誤解と偏見に満ちた、でたらめ記事に近いことを告発すること

から、本書を書きはじめる。記事では、同地域はムスリムによって占拠され、伝統的オーストラリア文化と生活様式が消滅しつつあると紹介されているが、実際には、非ムスリム系アジア人や旧東南欧系ヨーロッパ人、そして英語系白人オーストラリア人住民も多く住む多文化な町であると同時に、日常的なレベルで多文化な人々の間に多文化主義の精神が息づいて「日常的多文化主義 (Everyday Multiculturalism)」が実践されている。それにもかかわらず、一方的に同地域はムスリムに占拠されていると断定し、オーストラリアの将来について読者を不安がらせるものであった。

著者による調査はその事件の前の二〇一二年から一四年にかけて行われたものである。調査はオーストラリアのイスラーム嫌いの人々を研究対象としているが、オーストラリアのポピュリズム政党やムスリム排斥運動団体に所属している人々(政党・団体役員)ではなく、そのような政党や運動を支持しつつも、政党や運動には加わらない自称イスラーム嫌悪者である庶民 (everyday Islamophobes) に焦点を当てて、民族誌的なインタビューを繰り返しながら、イスラーム嫌悪者の実態を明らかにしようとする。政党や極右団体役員などを避けたのは、より日常レベルのイス

ラーム嫌いの実態に焦点を当てたからである。そのためインタビュー対象者三八名中、政党活動に熱心に参加するものの役員などではない「政治的イスラーム嫌悪者 (Political Islamophobes)」は一四名で、他は「日常的なレベルでイスラーム嫌悪 (everyday participants)」の言動を露わにする人々で二四名である。ポピュリズム・極右政党は庶民の代表だと名乗ってはいるが、時には、庶民とはかけ離れがちなその過激な主張に、反発するイスラーム嫌悪者庶民は多いことに注意したい。

筆者が対象としたイスラーム嫌悪者は三八名だが、内訳はアングロサクソン系オーストラリア人が二三名、非英語系移民およびその二世世代オーストラリア人が一五名 (イタリア系三名、中国系四名、インド系二名の他にギリシア系、マルタ系、ヴェトナム系、インドネシア系、スリランカ系、レバノン系各一名) となっている。本研究では、アングロサクソン系オーストラリア人のみならず、非英語系ヨーロッパ移民と非ヨーロッパ移民住民にもイスラーム嫌悪者が多いことから、彼／彼女らを重要な調査対象にしている。非ヨーロッパ移民系住民のイスラーム嫌悪については第六章でまとめられる。なお、調査対象者の選定は、イスラーム嫌いの人々を公募して集めるという訳にはいかず、

スノーボールサンプリング方式で何とか三八名をかき集めたということである。

第一章では、まず、オーストラリアに住むムスリム系住民の移住の歴史と、近年の居住分布について概説し、その移住の歴史が長いことを再確認した後、一般オーストラリア人による反ムスリムの認識が強化される最近の歴史を概観する。イスラーム嫌悪とは、オーストラリアに居住するムスリムの多くは、オーストラリアに長く定住し、あるいはオーストラリア生まれの国民であるにも拘らず、オーストラリアの伝統文化や生活習慣を受け入れず頑なにイスラーム信仰とその信仰に従った生活習慣や服装・食品を維持し、オーストラリア社会になじもうとしない人々であることを不快であると同時に不安に思い、オーストラリア文化・生活習慣 (Australian way of life) を守るためには、ムスリムの受け入れを制限するとともに排除した方がよいと考える人々である。オーストラリアでは少ないものの、欧米での過激ムスリムによるテロ活動が活発なため、過激主義がイスラーム信仰の結果であると考え、排除を求めるポピュリズム政党や極右運動を支持する。こうした人々が増えたのは、二〇世紀後半であり、白人地位の優位・優越性が脅かされると同時に動揺し (floating whiteness)、

白人性の復権が叫ばれはじめた時代になってからである。

ムスリム批判が展開しイスラーム嫌いの存在がさらに注目され始めたのは、九・一一前後のオーストラリアのシドニー西部郊外都市における中東系移民若者によるオーストラリア人女性集団強姦 (Pack rapists) 事件とその裁判、アルカイダのビン・ラーディン (Bin Ladin) の逃亡・殺害報道、東南アジア方面からのムスリム系ボートピープルの増加 (ボートピープルはオーストラリアでは、難民申請をして審査や入国を待つ人々を差し置いて、割り込み入国をする人々 (queue-jumpers) である) としばしば批判されている)、シドニー近郊のクロヌラ海岸での中東系若者と白人系オーストラリア人若者による騒動の際に、中東系若者は海岸侵略者 (beach invaders) などと批判された。欧米でのテロ騒ぎに加え国内中東系ムスリム若者を中心とした事件が連続し、ムスリム批判と多文化主義批判が展開するモラルパニックの時代となったとメディアが報じるようになる。

その結果、この時代には多文化主義よりはリベラルな価値と市民権教育が政府によって重視されはじめ、リベラルな諸価値を「オーストラリア的価値 (Australian values)」として強調するようになる。テロは「非オーストラリア的

行為」とみなされ、議会制民主主義を重視する市民権教育と社会的結束 (social cohesion) が強化された。さらに、欧米でのテロ事件やアラブの春以後のシリア難民発生とISの勢力拡大とテロ活動の活発化が進むと、オーストラリアのアボット連邦政府はIS空爆に加わると同時に、国内の社会的結束のためとして「チーム・オーストラリア (Team Australia)」の重要性を国民に呼びかけたのである。こうした出来事のおかげで、オーストラリアのムスリムは、皆一様に過激な信仰に毒された危険な人々であるとステレオタイプ化されるだけでなく、ムスリムは出身地も宗派も多様な人々より成立するものだが、あたかもムスリムという人種がオーストラリアに存在するかのようになり、その存在として表象されていくようになる (the racialized Muslim and racial Australianization)。

第二章から、インタビュー対象者となった自称イスラーム嫌悪者へのインタビューとその分析がはじまる。本章でイスラーム嫌悪者のムスリムに対する認識が紹介されるが、まず、嫌悪者の中心的話題になるのはムスリムの宗教性である。著者は、イスラーム嫌悪者たちにムスリム系の人々の印象について尋ねるが、多くの人々がイスラームへの信仰心の強さが、オーストラリア的生活様式になじまない原

因であり、問題だと感じていることが明らかにされる。それは服装にまず現れるとする。回答者の多くはその服装が目につくという。つまり、世俗主義のオーストラリアでは信仰は私的な領域に留めるべきなのに、ムスリムはイスラームをこれみよがしに見せびらかす、外向的な宗教 (wearing religion outwards) だと感じるのである。また、そのようにして多くのムスリムは宗教心の強さ (religious tall poppies) を誇示するが、それは不愉快であるという訳だ。

さらに、イスラームはどこにいても信仰儀礼を大切にすただけでなく、ムスリムが非マジョリテイである仕事場・学校・病院などにおいても礼拝場を要求するが (Spatial religiosity)、多文化主義の国とはいえ、信仰にともなう儀礼は私的な場で行うべきだし、オーストラリアのすべての宗教グループが礼拝の場を公的な場に求めたら大変なことになる。謙虚になるかオーストラリアから出て行くべきである。また、欧米だけでなくイスラーム過激主義がテロ活動を全世界で行っているが、それがイスラーム信仰に基づくものであることは間違いなく、暴力的な性格をイスラームはもっているに違いない。オーストラリアは、議会制民主主義に基づく法治国家であり、政教分離国家な

ので「シャリア法 (Sharia law)」はオーストラリアにはなじまないで認めるべきではない。イスラームは、さらに男女役割の違いと男女差別を奨励しており、市民社会の生活にはなじまないことは明らかである。イスラーム嫌悪の人々は総じてムスリム系住民の世俗主義 (公私分離・政教分離主義などの欧米的社会的な価値) を前提として、イスラームおよびムスリムに対する嫌悪感を露わにしているといつてよい。

第三章は、イスラーム嫌悪者に多文化主義とイスラームとの関係を問うことから始める。しかしながら、そもそもイスラーム嫌悪者は多文化主義を嫌う人々であり、同化主義を支持する傾向が強い。その回答は多文化主義が存在するおかげでイスラーム信仰が過激なムスリムを生み出すので、多文化主義は大いに問題だとするだけでなく、イスラームの過激化を許容するだけでなく、促進してしまうと批判する傾向が強い。その傾向は著者の回答者でも同じである。いずれにせよ、多文化主義はオーストラリアに住むムスリムやオーストラリア生まれのムスリムであろうと広く分裂的な存在 (Transruptive Muslims) であることを許すものである。

また、嫌悪者の多くは多文化主義について以下のように

主張する。多様性を認めるとはいえ、やはりそこには限界があり、オーストラリアの基本的価値や市民社会の生活様式は守られるべきであり、ムスリム系の人々も基本的な点で同化すべきであり、妥協すべきである。「良きムスリム」として生活すべきである。「過激なムスリム」の存在を認めるようなムスリム知識人、例えば、イスラームの価値（女性のブルカ着用や名誉殺人）などの正当性を主張する Uthman Badar などの主張は聞くに値しない。Badar と同様に、多文化主義者のなかにはキリスト教徒とイスラーム教徒との間の討論会を実施すべきだとする人も多いが、その必要はないという（実際、両者の対話は企画されたことがあるが、安全確保が難しいとの理由で中止された）。著者は、多文化主義とムスリムについてのインタビューからイスラーム嫌悪者は、多文化主義を認める場合でもオーストラリアの基本的価値や市民社会秩序・社会的結束を乱さないという限界があるというが、それはとくにイスラーム嫌いでない多文化主義者の人々のなかにも存在する議論であると指摘する。

第四章は、シドニーの南西郊外を離れて、シドニーの北にある海岸地方都市ベイサイド (Bayside: 仮称) でのインタビュー調査の結果が提示される。ここは、一九五〇年

代から白人労働者階級の避暑地として発展してきた地域である。それまでは農牧畜業を主体とする一地方都市に過ぎなかったが、第二次世界大戦後の高度経済成長時代に増加した労働者階級にとり、シドニー近郊にある手頃な避暑地となった。しかし、その時代は戦後の大量移民の時代でもあり、非英語系移民が増大し、英語系白人労働者の避暑地から南欧系白人移民労働者の避暑地へと変貌した後、八〇年代以降には中東系ムスリム系労働者も増加している。著者の家族も同地に別荘をもっている。イスラーム嫌悪者にはベイサイドに住む小売商・ホテル・観光業者などで観光客を顧客にしている人々や、同地を定年後の隠居地として生活を楽しむ人が多い。イスラーム嫌いの人々は、一方で増加しつつあるムスリム系労働者家族を顧客としている人々ではあるが、そのムスリム系の人々はレバノン系である。

ここでの問題は、ムスリム系の人々の家族は、伝統的白人労働者階級の家族構成に比べはるかに大きな大家族であり子供も多く、しかも複数家族での行動が多い。ベイサイドのレストランやカフェーなどは、少人数の核家族や友人たちの小さな会食を考慮してレイアウトされているが、ムスリム系の人々は大家族 (Two Adults and 17 Kids)

でやかましいし、動き回る子供も多く、静かに食事や買い物を楽しみたいオーストラリア系住民には鬱陶しい存在である。買い物においても列に並ばないとか、列に並ぶムスリムのなかには他の人の買い物頼まれる人物が多く、列に並ぶ時間が長くなるなどイスラーム嫌悪者住民には気に入らないことが多い。商売をする方もやりにくい。オーストラリア白人系顧客の苦情に対応しなければならぬので、イスラーム嫌悪者になる人も多い。

イスラーム嫌悪者の人々は、レストラン、ホテル、売店であれ、地域全体が増加するレバノン系ムスリムに占拠されていくようにみえる状態に不安を感じ、いずれはオーストラリア全体がムスリムに乗っ取られて行くのではないかと不安に取りつかれていることが明らかになる。少し冷静になれば、所得の増加とともに大家族も小家族になり、集団的な活動も個人化されていくのではないかと予測できるものの、住民の不安は拡大するばかりで、レバノン系ムスリムの無礼な行動はムスリム特有の人種の性格やイスラーム信仰のせいだとする傾向も強い (Racialising incivility)。いずれにせよ、白人オーストラリア人の居所 (The field of Whiteness) を取り戻す必要があると考える人がイスラーム嫌悪者には多い。ベイサイドの住民の

文化資本 (cultural capital) が攻撃されているという不安がイスラーム嫌悪者増大の原因である。

第五章では、イスラーム嫌いはある意味、非合理的で感情的で情緒的な行動だと論じられる。本章冒頭で、アングロサクソン系オーストラリア人のイスラーム嫌悪者である人物が、イスラーム嫌いになった出来事が報告される。彼とその彼女はムスリム系の人々とはもともと仲がよかったが、ある時ムスリムの友人二人を自宅での食事に招待したところ、礼拝時間と食事の時間が重なるので行けないとの連絡が入った。そこで食事時間を祈りの後に変更しようと申し出たが、それでもだめだという。理由を聞くと、一日の礼拝時間はいつも同じ時間ではないし、当日にならないとわからないので、場合によっては礼拝を招待者の家で行いたいというのである。そのオーストラリア人は、さすがにそれは無理だと感情的になり食事への招待をキャンセルした。もし食事中に礼拝時間が重なり、招待者の家でお祈りできないとなると、その時は外でお祈りするということで、それこそ近所が大騒ぎしそうなので食事への招待を断ったのである。それ以後もムスリムの友人はいるものの、イスラーム嫌いになったということであった。さすがに自分たちはキリスト教徒であり、キリスト教徒宅でムスリムのイ

スラームの祈りを許すわけにはいかないと感情的になったし、ムスリムの要求は過剰だと思つたのである。

次の話題は、オーストラリア政府がムスリム系の人々への便宜を図り、オーストラリア食品を安心して食べてもらうと同時に、売り上げを伸ばしたいとの配慮から、すべての食品にハラール食品であるかどうかを表示する「ハラール食品マーク」を付けさせることにした時に、イスラーム嫌悪者が感情的な反発を強めたという事態である。とくに、オーストラリア人の伝統的日常生活であるベジマイト（評者も気に入っているパンに塗って食べるベースト状のもの）につけることに感情的に反発したのである。自分たちのなじみの食品がハラール食品かどうか明らかにするマークを付ける必要があるのかという反発は、ある意味でベジマイトの売り上げを伸ばしたいと思う政府や業界を困惑させた。しかし、なぜ新参者のマイノリティのためにマジョリティの重要な食品に目障りなマークを付ける必要があるのかという反発は感情的なものである。たしかに、反発は非合理的なものだが、オーストラリア人、とくにイスラーム嫌悪者の感情を逆なでしたのである。

キリスト教徒は政教分離や世俗主義の下これみよがしの宗教的儀礼や儀式を私的な場所に限定しているのに、ムス

リム系の人々のイスラーム信仰は、そうしたキリスト教徒の遠慮にお構いなしに過大な要求をするし、政府はある意味で多文化主義を基礎に過剰に反応し、結果的にオーストラリア人の感情を逆なでしているという訳である。こうした感情的反発の背景には、伝統的オーストラリア人の文化・宗教・生活習慣が多文化主義の下でないがしろにされ、自国の主人であるはずのマジョリティ国民が周辺化され、白人オーストラリア人の利益・アイデンティティが侵されていると感ずることに原因があると指摘される。そうした感情的な反発に加え、二〇一〇年代前半の調査期間中にさらにテロ事件がオーストラリア内外で続いたことから、イスラーム嫌悪は拡大していった。ムスリムはテロリストだという疑いと不信が確信となり、イスラーム嫌いはさらに広がった。それは、二〇一四年一二月のシドニー・マーチンプレイスにある「リンドカフェー」を舞台にした武装イスラーム教徒による人質事件と武装警察との間の銃撃戦で最高潮に達した。当時のアボット首相が「チーム・オーストラリア」を宣言したのはその直後であった。

第六章では、インタビュー調査から、マイノリティが他者化されるメカニズムが明らかにされる。イスラーム嫌悪者は次のように主張する。オーストラリアでは、マイノリ

テイ移民グループは戦後直後からしばらくは白豪主義的同化主義の下で、そして八〇年代からはすべての文化の平等を謳う多文化主義の下でも同化の努力をしてきた。とくに多文化主義の下でも、基本的なオーストラリアの価値は重視され、その中核的価値を傷つけない範囲での多様性を承認するという方針があり、マジオリテイの中核的価値と周辺化されたマイノリティの価値という支配従属的關係性が維持されている。すなわち多文化主義にも限界 (the limit of Multiculturalism) があり、ムスリムにも「ムスリム性の限界 (the limit of Muslimness)」があるということになる。このような同化主義・多文化主義のなかで戦後の非ムスリム系マイノリティ移民・難民は対応に皆一様に努力してきたのだが、ムスリム移民・難民マイノリティグループのみは、大人しく同化努力をすることで、多文化主義の多様性承認の限界を超えて、イスラーム信仰とそれに基づく生活様式を貫こうとする人々であり、その要求は多文化主義の枠を大きく超えているということになる。

このような多文化主義観は、オーストラリア人の多くに共有されており、英国系移民 (Fogies) でさえその伝統に従ってきたのである。すべてのオーストラリア国民は、先住民以外、皆移民なのだから、全員が同じ経験をすべきで

あるというのが、イスラーム嫌悪者の共通の認識であることがインタビュ調査から明らかになると著者はいう。いずれにせよこうしたオーストラリア多文化主義の枠という暗黙の前提に対するムスリムの無関心が問題だと、イスラーム嫌いの人々はこのことである。結局、オーストラリアを支配するのはムスリムではなくオーストラリアのアンクロサクソン系白人オーストラリア国民だという訳である。この議論には、マイノリティ移民・難民の方が適応に努力すべきであり、アンクロサクソン系白人の方に妥協や歩み寄りも必要だという議論を見出すことは困難である。

本章の後半では、非英語系ヨーロッパ人移民や非ヨーロッパ系移民やその子孫へのインタビュからは、多文化主義の下でも白人性とその基本的価値は重視され、非英語系ヨーロッパ人や非ヨーロッパ系移民・難民の価値や生活習慣・宗教の戒律等は周辺化されるべきだという考え方は、非アンクロサクソン系オーストラリア人のイスラーム嫌いの人々に共有されているだけでなく、異文化系移民・難民集団も共有していることが明らかになる。むしろ、そうしたオーストラリアの基本的価値体系と自分たちの価値・文化との間にある中核・周辺関係を受け入れ、価値や宗教面での妥協を図るという苦勞をして、ようやくオーストラリ

ア人として認められた「モデル・マイノリティ」である。しかしながら、最近のムスリムはそのような努力もせずに、多文化主義の下でイスラーム的生活様式を押し通そうとする凶々しい連中 (indigestible muslims) ある。だから我々もイスラーム嫌悪になったのだと主張する。非アングロサクソン系移民系国民の多くは、意識的であれ無意識的であれ、アングロサクソン系白人オーストラリア人の、文化的優位性を認め、その存在をむしろ支持しているのである。そのことによってオーストラリアに帰属し、自分たちも支配的国民に属しているとの感情をもつことができるようになる、ということが明らかになる。非英語系イスラーム嫌いの人々のなかには、まずオーストラリアでは新参の移民・難民集団は当初いじめられるが、時間とともにオーストラリア社会に同化・統合され、いずれ仲間として認められるというプロセスが繰り返されてきたので、ムスリムはいずれそうした範疇に入ると楽観的に考えるものもあるが、ほとんどの嫌悪者は他者のままだろうと考えている。

結論では、以上の議論からいえることを幾つかにまとめる。まず、政治的イスラーム嫌悪者白人にとり、イスラーム嫌悪は、白人オーストラリア人の文化的優位性が脅かされ、自らの政治的な支配的地位も脅かされているとの不安

を払拭し、増加するムスリムにオーストラリアが乗っ取られないように白人の優位性を復活させたいという気持ちから生じるものであり、非アングロサクソン系移民・難民系国民も、自らをアングロサクソン系オーストラリア白人中心の社会的価値構造に意識的に同一化させて、自らをモデル・マイノリティとみなし、そうでないムスリムを白人同様の観点から批判し、ムスリム系移民グループと自分たちが一緒くたに理解されないよう、差別化するためにイスラーム嫌悪者になっている。イスラーム嫌いの背景には伝統的なオーストラリアの白人中心性が息づいているということが分かる。そして、モデル・マイノリティでないムスリム系の人々を、非アングロサクソン系を含むオーストラリア人のなかの「他者」として確立していくのである。

その際に白人性の中に含まれる世俗主義や政教分離主義は宗教や迷信からの離脱・近代化・合理化を意味するので、世俗主義や政教分離主義を受け入れないムスリムは遅れた人々で文化的に劣った人々であるとみなすことになり、白人優位性が再確認されることになる。こうした白人性を受け入れないのであれば、国へ帰るが一番という訳である。

こうした白人性を暗黙のうちに前提とするオーストラリアの価値体系を内面化・社会化しているのはイスラーム嫌

悪者だけではない。多かれ少なかれ、多文化主義者でも内面化していると思われる。こうした暗黙の社会的前提は無視・軽視されがちなので、今後はこうした社会的価値体系の存在に自覚的になること (attention to inattention) が、イスラーム嫌悪への重要な対応方法となるであろう。だから、イスラーム嫌悪者に市民教育やイスラームやムスリムに対する正しい基礎的な知識の普及を求めたところで、白人優位の価値体系は再確認されるだけであり、効果はないであろうとして議論を閉じる。

評価

オーストラリアは、一九七〇年代にカナダに倣って多文化主義の導入を決め、一九八〇年前後より本格的に導入し、それから三八年以上が経過し、連邦政府による多文化主義政策への批判が強まる現在でも、多文化主義政策は州政府のレベルでは根付いているといつてよい。連邦政府の「公定多文化主義」は縮小されてはいるが、州政府・地方自治体レベルでは社会統合支援政策として根付いており、近年では政府による「上からの多文化主義」(公定多文化主義)ではなく、日常生活レベルでの多文化主義、すなわち「日常的な多文化主義」への注目も進んでいる。しかし、その一

方でムスリム系移民・難民(ポートピアブルを含む)に対する排他主義的な意識が国民の間に強まっているだけでなく、多文化主義への批判も強まっている。ポートピアブルについては、二〇一三年にアボット政権の移民大臣が、国際非難を承知で、たとえ難民であることが認定されても海から上陸した場合には永住権を与えることはないという厳しい対応を導入している。それはイスラーム嫌悪者が増えたことと、こうした人々の支持を吸収して勢力を伸ばすポピュリズム・極右政党や運動団体が増殖していることにつながっている。

本書から明らかにされるのは、アングロサクソン系オーストラリア白人のイスラーム嫌悪者と、非アングロサクソン系ヨーロッパ移民系や、非ヨーロッパ系ムスリムアジア系のイスラーム嫌悪者は皆一様に、白人性を核とした思惟構造を内面化しているが、それは非イスラーム嫌いの人々がもつものと同じだという点である。このような議論はガッサン・ハージの『ホワイト・ネイション』にみられるが、著者が大きな影響を受けたのがハージ教授の議論だと謝辞において述べているので当然であろう。ただ、このようなことは、もともとオーストラリア政府の多文化主義およびその政策には、確かにすべての文化の平等を謳う部

分があり、差別はいけないとするとところがあるが、他方で「多文化主義の枠」として、多様性の承認には一定の制限があることも明言しているのである。それは、多文化主義政策が本格的に導入される前の一九七〇年代の多文化主義政策に関する政府諮問委員会の各報告書や、一九八九年の「多文化オーストラリアの新しい課題」と称する多文化主義に関する政府見解を示した政府文書にも明らかであり、そのことを考慮すると当然すぎる結論である。

ある意味で、オーストラリア多文化主義はカナダのそれと同様に異文化の人々にとり窮屈な存在なのである（それは公定多文化主義であれ日常多文化主義であれ同じである）。多文化主義は白人による管理の下で多文化性とそれへの制約が強制されていると考えてもよいだろう（白人多文化強制）。こうした多文化主義の下では、自文化の異質性を承認してはくれるが、それには限界があるということであり、移民・難民排斥やイスラーム嫌悪者が出てきても当然である。多文化主義を批判する人々はこの点を見逃して、多文化主義は何でもかんでも多様性を認め、極端な価値相対主義に陥りやすく分裂的なものだから、基本的価値を明らかにすべきだというが、その批判はおかしなものがある。初めから、オーストラリア多文化主義には限界があ

るのである。それは市民社会の民主主義的な価値・リベラルな価値の尊重ということである。また、多文化主義は世俗主義や政教分離主義を前提としているので、宗教に強くこだわらる人びとには窮屈なものだが、世俗主義を前提とすれば多文化共生は可能だが、宗教主義にこだわらる人びとが増加すると限界があらわになるという弱点をもつものである。多くの移民・難民は貧困だけでなく、権威主義的で不自由で暴力的な社会から逃れてきたものだから、基本的政治・社会的価値を尊重するものだが、キリスト教以外の宗教に強くこだわらる人びとの場合には対応に困難がともなうのである。

それはともかく、いずれにせよ、オーストラリアの多文化主義は何でもかんでも多様性を承認するという過激な多文化主義ではない。むしろ中庸な多文化主義である。といって多文化料理や衣装・お祭のみを中心とする表面的で象徴的な多文化主義でもない。「多文化主義の目的」と「多文化主義の枠」についての議論、あるいは多文化主義の多様性についての議論をここで繰り返すことは紙幅の関係上でできないが、まさに、公定オーストラリア多文化主義の基本的な部分がおーストラリア国民の間に根付いていることと、それはイスラーム嫌いの人々が好む議論の展開を

許すような性格であったということが本書によって証明されたといつてよい。また、世俗主義や政教分離（公私の区分）を多文化主義が前提しているということは、宗教に強い帰属心をもつ人々は近代化されていない遅れた後進的な人々であるという差別的な議論を許してしまうという問題があることもわかる。

ただ注意したいのは、自由・平等・民主主義、そして寛容・世俗主義を標榜する民主主義社会について根源的に考えれば、それは、人権の一部として文化・言語・宗教の多様性を認めるはずのものであるから、民主主義社会は皆多かれ少なかれ多文化社会であり、そのようになりがちなものである。その民主主義社会の多文化性を擁護し、維持するために工夫されたはずの多文化主義は、自由・平等・民主主義を否定するような文化を認めることは難しい。逆に民主主義を守るという観点から排外・排斥主義の登場を許すという多文化主義のパラドクスが生じるのである。今後、オーストラリア多文化主義がムスリムの人々を包摂し、他者扱いしないようにするためにどのように改良すべきなのか、あるいはイスラーム嫌いをなくすには何をすべきか、という点について本書はあまり多くを語っていないが、ハージ教授がよく指摘するオーストラリア多文化主義の基本

的な問題点がイスラーム嫌いの人々の研究から再確認されたといつてよい。そのような意味では大変貴重な実証的研究成果であると結論づけられる。

(New York: Routledge, 2018 (195pages including Indexes))

関根 政美